

第43回学習会を、平成25年1月25日(金)19:00~20:00福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

### 第43回の内容

講師 重枝一郎先生

- 教師と生徒の二者関係
- 「言葉のキャッチボール」「何ができるの？」(デモンストレーション)
- SST「さわやかなあいさつ」(実践映像)
- GWT「色えんぴつ忘れちゃった」(演習)



## 教師と生徒の二者関係

### 1 エンターテイメント性がない

「どうも子どもたちとうまくいかない」

「言葉や態度を子どもたちに理解できるように置きかえているのに・・・」



これは

- ・教師の対応が、自分が思っているように伝わっていない
- ・タイミングが悪い 状況にマッチしていない

生徒は

- ・教師の思いを察して反応しているのではなく、自分が受け取った**印象**に素直に反応している

☆ バーバルとノンバーバルのズレ (エンターテイメント性がない)

☆ 日頃から言葉に付随する雰囲気や態度、表情を意識して対応することが大切

### 2 教師のIメッセージがない

「なぜ、勉強しないとイケないの」「なぜ、学校に来なくてはイケないの」

これは

- ・損得勘定の説得では心に落ちない
- ・教師の人生観や人生哲学がない

生徒は

- ・はぐらかす教師、言行不一致の教師を最も嫌う

☆ 日頃の話す内容にも教師の人生哲学が背景にあり、一貫性があることが大事

そして、日常の行動に基づいていなければならない

### 3 適切に対応できていない

「教師は、教師の言うことを素直に聞く生徒を好む」(素直さ)  
「最近の子どもは言われたことしかしない」(気を利かせた行動)



これは

・その教師がもっている一定範囲というフレームの中での話し

生徒は

・生徒もフレームをもっている  
・親しみを込めた教師のかかわりもマイナスになることがある  
(優しさ=お節介 陽気=軽薄 率直=無神経)

☆ その生徒に対してのほめ方、叱り方があり、適切なタイミングや長さがある

### 4 生徒理解のゆがみ

○ ハロー効果 ○ ステレオタイプの理解 ○ 教師の個人的要因 ○ 教師の好み etc.

☆ 日頃から意識していないと陥ってしまう盲点

勇気をもって自己点検することが「ゆがみ」を防ぐ最も有効な方法

### 5 正しい方法って!?

以前は有効だった方法?

そもそも方法って?

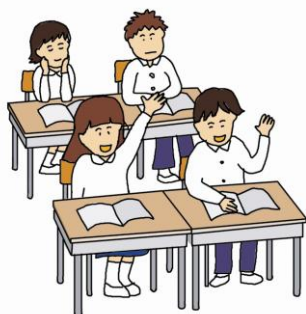
特定の状況 → 特定の目的

手段 = 方法

方法の有効性は、状況 と 目的 に照らして考える

この状況の真ん中には 自分 がいる

自分に合った方法が正しい



## 解説

### 人間関係づくりの最初は「二者関係」

子どもたちは、新しい環境の中でどのように人間関係を築いていくのでしょうか？これは、大人でも同じです。想像してみてください。周りは知らない人ばかりの集団に、ひとり、転入生のように入っていくときの気持ちを……。きっと、不安が100%です。そんなとき、どのようにして集団の中で、他者と関係性を築きますか？

集団として見ると、不安は高まる一方です。しかし、個で見るとどうでしょう？Aさんとは、気が合いそう。Bさんとは、波長は合わないけれど、この部分では話ができそう。このように、個々で見ると、それぞれに対応を考えることができます。

二者の関係から徐々に全体との関わりにつなげていく……。このような段階を踏んで、集団が自分の居場所になっていきます。

### 教師のエンターテイメント性とは・・・惹き付けて説得する力！

「カウンセリングマインド」や「説教」の時代は終わった！！今の教師に求められているのは「エンターテイメント性」だと考えます。子どもは感受性が強いのです。それは、防衛本能だといえます。理屈ではなく感覚的に、大人の本質を見抜きます。

教師は得てして、勘違いをしています。子どもたちは、教師の思いを察知して行動しているのだと……。教師の「説教」に従っているのだと。しかし、そんなバラ色の世界はありません。子どもたちは、教師の「印象」に素直に反応しています。それは、日常的に受け取っている表情や言葉や振るまい等から得る「印象」です。バーバルとノンバーバルの両方からの情報で、本能的に判断しているのです。

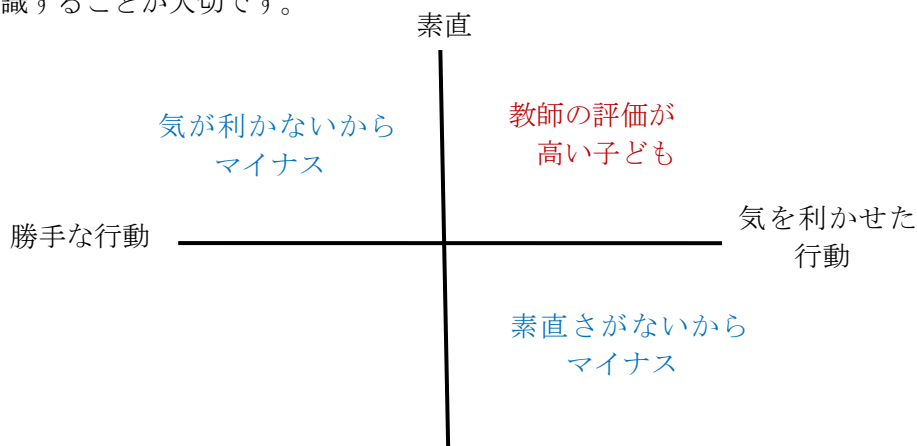
中学生は思春期であり反抗期です。教師を一人の大人として評価します。例えば、この先生は信頼できるのかどうか……。口では偉そうなことを言っているけど、態度が伴わないと、それを鋭く見抜くのが中学生です。その教師の背景を見ようとします。つまり、教師に人生哲学があるかどうかという「人間性」です。

それに比べると、小学生は従順です。ただし、高学年になるにつれて、思春期の中学生のように、教師を評価するようになります。だからこそ、教師は「大根役者」であってはならないのです。その事実を謙虚に受け入れて、自分自身を自己点検する習慣をもつことが、エンターテイメント性を身に付ける第一歩です。教師は無意識に、自分が「評価者」だと思っています。しかし、常に子どもたちや保護者から「評価」されているのが「教師」です。だからこそ、「Iメッセージ」で自分を語ることです。そして、言行一致です。日常の行動を意識します。思春期の生徒が最も嫌うのは、「はぐらかす教師」「言行不一致の教師」です。「自分は教師として、一本筋が通っているのか？」定期的に自己点検をしたいと思います。

### 「フレーム」を意識する

教師は、素直に自分の言うことを聞く子どもを好む一方で、気を利かせた行動を求めます。

しかし、ある子どもが「気を利かせた行動」をしても、その先生のフレームを外れていたなら、同じ行動が「勝手な行動」と評価されます。これは、教師が一定の「フレーム」の中で評価しているからです。その教師のフレームを外れていたなら「マイナス」評価をしてしまうという罠に陥るのです。このような「ゆがみ」に陥らないように、日頃から意識することが大切です。



子どもを理解するときには、「ありのままの子ども」を受け入れているか、自分のフレーム（考え方の枠組み・思い込み）による「ゆがみ」はないか、それを「自己点検」します。

その際、「ハロー効果」「ステレオタイプの理解」「教師の個人的な要因」「教師の好み」等について、検討します。

	内 容	例
ハロー効果	優れた点（悪い点）を1つ発見すると、他の全ての面も優れている（悪い）ように判断してしまう	体育会系のキャプテンをしていたら、体力もリーダーシップも行動力もあり、人望も厚い人物と評価する
ステレオタイプ（先入観）	社会的通念に人物特徴を当てはめて、決めつけてしまう	一人っ子だからわがまま、血液型がA型だから几帳面等
個人的な要因	自分の生育歴等から、特別な思い入れをもつ	自分が母子家庭で育ったから、母子家庭の子どもに特別な思い入れをもって接する
個人的な好み	自分の好み、独自の価値観で評価する	自分がスポーツをしてきたから、文化系より運動系の子どもを好む

同じ子どもに対して、教師の評価と子どもたちからの評価は違うことがあります。子どもから情報を得るには、教師が日頃から意識してコミュニケーションをとる必要があります。さりげない会話をきっかけに、普段は見せない子どもの表情や本音を引き出すことができます。

教師にも「フレーム」がありますが、子どもも「フレーム」をもっています。それぞれの「フレーム」を意識しながら、お互いの「ありのまま」を尊重し、受け入れる「関係性」をつくるのが、「決めつけ」や「ゆがみ」を回避するひとつの方法だと思います。

### 正しい方法って・・・？

小学校では特に熱心に、授業研究が行われています。授業後には、指導案や授業の手だて等について協議を行います。

以前は有効だった手だてや方法が、今の時代の子どものには通用しないことがあります。子どもの質も変化しています。また、学校や学級の実態によっても違いがあります。

それでは、有効な手だてや方法って何なのでしょう？すべての子どもに有効な手だてや方法があるのでしょうか？

忘れてはならないのは、手だてや方法ありきではなく、子どもの実態や状況と目的に照らし合わせて授業デザインを考えることです。もうひとつ、大切なことは、その真ん中に「自分」がいるということです。授業者である自分の持ち味や個性があるのです。ある先生にとって有効だと思う方法や手だては、自分には合っていないかもしれません。だからこそ教師は、ベテラン教師も若年教師もみんな、学び続けるのです。



## 演習 「言葉のキャッチボール」「何ができるの？」

### 言葉のキャッチボール

【テニスボールを使ったエクササイズ・2人組でデモンストレーション】

言葉は目に見えません。だから、平気で相手を傷つけることがあります。見えない「言葉」を見える「ボール」に置き換えて、言葉の力を実感させるエクササイズです。

テニスボールが自分の「心」だとします。その「心」を言葉と一緒に相手に伝えます。まず、子どもに「ありがとう」と言いながら、気持ちを込めてボールを投げるように言います。子どもは、優しくボールを投げながら「ありがとう」と言います。そのボールを受け取って、教師は笑顔で「ありがとう」と言いながら、強くボールを投げつけます。そして、子どもにインタビューします。「どんな気持ち？」

次に、「先生がしたのとは反対の、相手が気持ちよくなるような『ありがとう』をください」

もう一度、ボールを投げるように促します。子どもは、さらに心を込めてボールを投げます。そのボールを今度は無視して受け取りません。そして、インタビュー「どんな気持ち？」

ボールを強く投げつけられるのも、無視されるのも、どちらも悲しく傷つきます。その様子を見せながら、子どもたちに考えさせます。

「言葉が強すぎないか、弱すぎないか、無視していないか、傷つけていないか、自分の『心』が『言葉』を通してちゃんと伝わっているか、いつも意識してほしい。ひとつの言葉にはそれぞれ、ひとつの心が込められているのです」

次の詩を紹介してもいいと思います。

ひとつの言葉でけんかして	ひとつの言葉で仲直り
ひとつの言葉で頭が下がり	ひとつの言葉で心が痛む
ひとつの言葉で楽しく笑い	ひとつの言葉で泣かされる
ひとつの言葉はそれぞれに	ひとつの心をもっている
きれいな言葉はきれいな心	優しい言葉は優しい心
ひとつの言葉を大切に	ひとつの言葉を美しく

この詩の作者は誰なのか、はっきりしていません。北原白秋という説もありますが、白秋には同じタイトルの別の詩があります。映画「男はつらいよ」で寅さんのセリフで出てきたり、映画評論家の淀川長治さんの「好きな言葉」に挙げられたりしているようです。





何ができるの

【図形のパーツを組み合わせて形をつくるエクササイズ・二人一組で行う】

「伝えるのは難しい」と、実感するエクササイズです。

まず、デモンストレーションをします。伝える側は相手（受け手）の表情が見えない位置に立ちます。そして、言葉だけで伝えます。

封筒の中に、三角形や長方形、台形等のパーツが入っています。受け手は、そのパーツを組み合わせて、何かの形を完成させます。

言葉だけでのコミュニケーション開始です。

「台形はありますか?」「あります」

「黒板にはって下さい」「はりました」

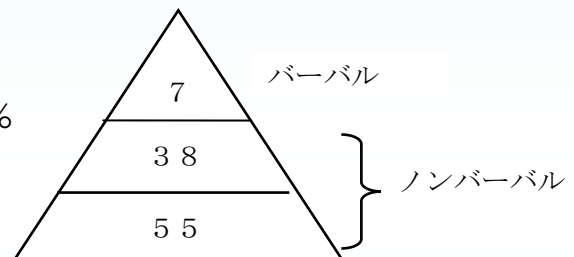
「下が長くなっていますか?」「下が長いんですね。はりました」

「台形の下に三角形をくっつけてください。バランスよくひっつけて」「バランスよく?」

.....

言葉だけでのコミュニケーションは、意外と伝わりにくく、もどかしいものです。それは、ノンバーバルコミュニケーション（非言語的）という、言葉以外でのコミュニケーションがとれないからです。ノンバーバルコミュニケーションについては、アメリカの心理学者、アルバート・マレービアン博士による、人が他人から受け取る情報（感情や態度など）の割合についての実験結果が有名です。

- 話す言葉の内容 7%
- 声の質（高低）、大きさ、テンポ 38%
- 顔の表情 55%



話す言葉の内容は7%に過ぎず、残りの93%は顔の表情や声の質によって判断しているという実験結果です。これはマレービアンの法則、もしくはメラビアンの法則と呼ばれています。

また、コミュニケーションの内容は、意味面と感情面を統合させたときに、うまく伝わります。意味だけを伝えられると事務的になります。意味が伝わらないと、イライラしていきます。そして、モチベーションも下がっていきます。そこに感情面が加わると、どうでしょうか？

感情交流ができると、ストレスが軽減され、モチベーションが高まります。それを実感できるのが、参加体験型のよさです。

感情交流の鍵も、「言葉」です。言葉の力については、子どもたちに力説したい内容です。特に、小学校高学年から中学生にとっては、先生からほめられたり親からほめられたりする以上に、友達の言葉が大きな影響をもつのです。「友達からの言葉は一生残ります。ずっと心に残ります。嬉しいことを言われても、イヤなことを言われても、一生残ります」

「伝えるのは難しい」「言葉は目に見えないけれど、心を伝えることができる」「友達からの言葉は一生残る」教師はエンターテインメント性を発揮して、子ども達に「伝わるように」心に語りかけてください。

## 本日のキーワード

- エンターテイメント性（バーバルとノンバーバルのズレを意識して対応）
- 教師の I メッセージ（教師の人生哲学を背景に、「一貫性」と「日常の行動」を意識）
- フレーム（方法の有効性は「状況」と「目的」に照らして考える。その状況の真ん中に「自分」がいる）

### ♪ 学習会に参加された先生方の感想 ♪ （参加人数 44名）

・「印象に反応しただけで、思いに反応したのではない」という言葉が心に残りました。確かにそうだと思います。エンターテイメント性をもっている先生が歩いているだけで生徒は雰囲気を感じとるので、惹きつける魅力がまずは必要だと学びました。

前回、学んだモラルジレンマの授業を実践しました。生徒は興味をもって取り組んでいました。また、道徳について講義があればいいと思います。

・つつい自分の物差しで判断してしまうので、今日の内容は耳の痛い所もありました。相手の気持ちを察しながら、モチベーションを高める術を解明していただけた気がします。「北風と太陽」の太陽のように、言葉ではなく相手を内面から動かすスキルを身に付けたいと思います。

・今日の学習会では、自身の教師生活を振り返り納得することばかりでした。特に、経験が浅いため、本を読んだり話を聞いたりしたことから方法にとらわれて、子どもと接していたように思います。でも、子どもたちは一人一人違っているし、状況も様々です。重枝先生の「自分に合った方法が正しい」という言葉に、勇気をいただきました。同時に、自己点検をして子どもたちにフィードバックしていきたいです。私自身、風土会で学ぶことで自分のゆがみをなおし、新たに刺激を受けて、明日への活力をいただいています。

(人は学ぶことで、「自分の物差し」や「自分の枠（フレーム）」「とらわれた考え方」に気付かされます。子どもにどのような「印象」を与えているのか・・・子どもからフィードバックをもらう「自己点検」の時間を大事にしたいです。フレームを広げていく方法は、子どもから学ぶ、出会いから学ぶことだと思います。)

・いつも言われることですが、GWTを日常につなげることが重要だと思います。それはよくわかっているのですが、なかなか日常へとつなぐことが難しいです。やはり、学年、学校というチームで取り組んでいくことが大切だと思います。

・GWTは、初対面の先生方と一緒に体験してとても楽しかったので、ぜひ、学校でも実践したいと思います。ほんのちょっとした具体的な場面を設定することで、人間関係づくりの潤滑油になります。その中で、教師の言葉かけや雰囲気づくりが、とても大切な役割を果たすのだと実感しました。『脱・大根役者』をめざして、これからも勉強していきたいと思います。

(GWTは方法であって目的ではありません。何をめざしてGWTをするのか、そのビジョンをもっていれば、日常につなげることが簡単です。フットワークを軽く、どんどん試してみればいいと思います。)

・「方法の有効性は状況と目的に照らして考える」という言葉が印象に残りました。方法論を紹介した本や例は多くあります。「方法をとること」が目的になっているような実践には違和感をもっています。「状況と目的」を常に考えていくことは、現場にいて生徒に接している教師にしかできないので、その『目』を磨いていきたいと思います。

・「教師の I メッセージがない」という言葉が、自分に当てはまっていると感じました。子どもたちに自分の想いやエピソードを伝えていけるよう、日頃から自分や自分の人生を振り返り、引き出しをもっておくことが大事だと感じました。

・板書されている内容も重枝先生のお話もエクササイズもそれぞれ深い意味があることばかりでしたが、千代中学校での実践 VTR に出てきた「意味+行動+感情=教科を越えた指導力」という言葉が印象に残りました。